

1 研究のきっかけ

宮崎県椎葉村尾前方言のフィールドワーク

2013 年から、友人たち（方言研究者）と学生たち（現勤務先の学部生）と一緒に、宮崎県椎葉村尾前地区で記述文法・辞書・テキストを作るためのフィールドワークを行っている。2015 年から、基礎的な構文論のスケッチを開始し、学部の演習科目などを使って格体系の調査をはじめたところである。

対格交替

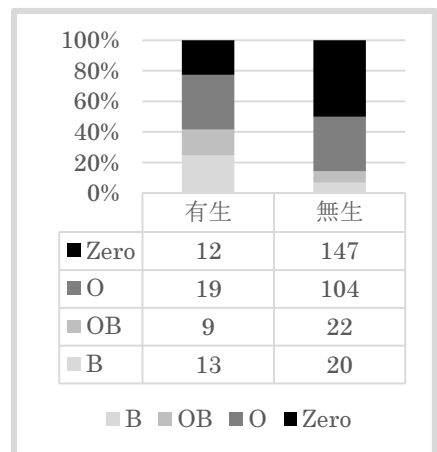
尾前方言には、九州・琉球方言に特徴的な主節主格の交替（ガ系 vs. ノ系）がある。一方、ほかの九州方言にあまりない特徴として、目的語(P)の有形標示（ヲバ）vs. 無助詞（ハダカ標示）の交替がよくみられる。全国の諸方言にも同様の対格交替が多数報告されており、①P と動詞の隣接性、②取り立て、③P の有生性などの要因が報告されている（佐々木 1998, 松田 1998, 日高 2005, 小西 2015, 木部 2015 など多数）。尾前方言では、①隣接性（非隣接は有形標示）と②取り立て（焦点化 P は有形標示）が有効であることがわかっている。紙数の都合上、本発表ではこれらについては扱わない。

有生性と対格標示

尾前方言の有生 P は確かに有形標示になりやすいがハダカ標示も見られ、逆に無生 P に有形標示が生じることもある。

- (1) toto=ga kantyoo utikoryeeta=tyuu=wai.
 父さん=が 鹿 殺した=らしい=よ
- (2) ondoma yuu kaki=ba kuu.
 俺たちは よく 柿=を 食べる

表 1. 対格交替と P の有生性



有生が有形標示になりやすいのは全国諸方言の対格交替の傾向と合致する。しかし、例えば東北方言のコト（トコ）とハダカの交替のように、明確な制限（有形は有生のみ）がみられない。では、尾前方言の対格交替において有生性は非関与的なのだろうか？

相対的有生性という観点

これまでの調査で、話者が「有形標示しかダメ」という場合が確かにあることは知っていたので、その種の例を全部集めて検討しているうち、「A の有生性のほうが P の有生性より低い」という共通点に気

が付いた。この気づきは、すべての例文データに対して、（主格交替の調査用に）「Aの有生性」と（対格交替調査用に）「Pの有生性」という欄を作って整理していたことによる偶然の産物である。尾前方言においては、これまでの日本語諸方言の対格交替で注目されてきたPの有生性（絶対的有生性）よりもAとPの有生性の階層の相対的關係（相対的有生性）のほうが重要なのではないかと考えるに至った。

(3) 仮説1：尾前の対格交替は、Pの絶対的有生性で決まる。

仮説2：尾前の対格交替は、AとPの相対的有生性で決まる。

2. 現象の検証に用いたデータセット

調査票のデザインと調査の実施

相対的有生性に関して、Aが階層上位である場合を「順行」と呼ぶことにし、AとPの階層位置が等しい場合を「等位」、Pのほうが階層上位である場合を「逆行」と呼ぶことにする。有生性を人間・動物・無生の3カテゴリーに分け、不自然になりがちな無生主語他動詞文（後述）を排除すると、組み合わせは以下の6通りになる。以下で、実線の区切りが絶対的有生性の区切り、破線の区切りが相対的有生性の区切りである。いずれの区切りによって説明できるかがポイントとなる。

表2. 対格交替を調べるための調査例文セットと実際の調査結果

	Pの有生性	相対的有生性 (A, P)	話者1	話者2	話者3
(a) 友達は外を見ている。	無生	順行 (人間 > 無生)	(ACC)	(ACC)	(ACC)
(b) うちの犬は外を見ている。	無生	順行 (動物 > 無生)	(ACC)	(ACC)	(ACC)
(c) 友達はうちの犬を見ている。	動物	順行 (人間 > 動物)	(ACC)	(ACC)	ACC
(d) その鹿はうちの犬を見ている。	動物	等位 (動物 = 動物)	(ACC)	ACC	ACC
(e) 友達は太郎を見ている。	人間	等位 (人間 = 人間)	(ACC)	ACC	ACC
(f) うちの犬は太郎を見ている。	人間	逆行 (動物 < 人間)	ACC	ACC	ACC

(4) a. 話者3人（話者1は80代男性，話者2, 3は70代女性），2015年9月と16年3月に実施。

b. 標準語の提示文を翻訳してもらう。

c. 提示文からヲを除いて提示し，それを翻訳してもらう。（標準語の構造的影響を排除するため）

(b)のやり方では標準語の構造的影響を受ける可能性があるものの，上記のコントロールされた条件を正確に満たすために，（最初は画像提示などいろいろ非翻訳型を試みたが）結局(b)に落ち着いた。なお，標準語の構造的影響を受けにくくするため，同一話者に(b)(c)を行ったが，結果は同じであった。

結果の分析

話者の文法性判断をなるべく明快に整理するため，ACC「有形対格のみを許容」と(ACC)「有形対格も

ハダカ標示も許容」でコード化した。表から明らかなように、3 人の内省が一致することはなかったが、相対的有生性か絶対的有生性かのいずれかでうまく説明できそうな体系になっている。

(5) 話者 1：相対的有生性の対格交替（逆行 vs. 等位・順行）：仮説 2 を支持

話者 2：相対的有生性の対格交替（逆行・等位 vs. 順行）：仮説 2 を支持

話者 3：絶対的有生性の対格交替（P が有生 vs. P が無生）：仮説 1 を支持

相対的有生性ベースの対格交替のメカニズム：理論的予測

言語一般における他動詞文の典型は順行（特に A が人間で P が無生）であると予想される（Næss 2007 など多数）。順行他動詞文が高頻度であるため、聴き手に「他動詞文は順行である（有生性が低いほうが P）」というデフォルト予測が存在しており、デフォルト予測が効かない場合に、なんらかの警告のシグナル（形態的標示）が必要になる、と考えるみよう¹。

(6) 話者の有形対格標示の階層：順行 < 等位 < 逆行

順行：格標示に頼らずに A と P を同定できると話者は期待できる。格標示不要。

等位：デフォルト予測を利用不可能。別手段で格関係を同定できるなら格標示不要。

逆行：デフォルト予測によって A と P を間違えて同定する危険性あり。格標示必要。

この階層は、「対格交替において等位を有形標示するなら、逆行も有形標示する。」という予測を生む。話者 1 と 2 の有形標示の分布はこの階層から説明できると発表者は考えている。

自然発話データによる検証

表 3. 尾前方言の自然発話データと対格交替

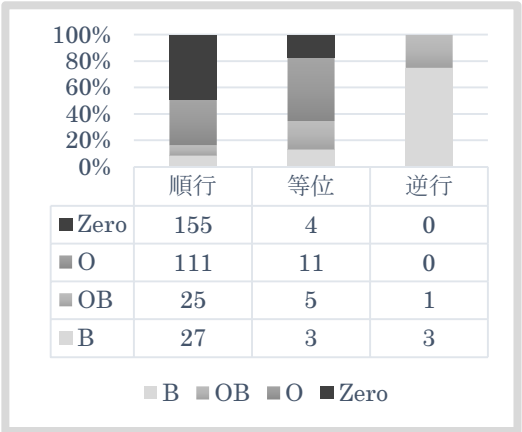


表 4. 自然発話データからの抜粋例

順行	ten=ga	yamamomo	totte	kutoru
A > P	デン=が	ヤマモモ(を)	とって	食べている
等位	nekaa	nezumi=o	uute	sarikioru=huu
A = P	猫は	ネズミ=を	追って	まわってる=ようだ
逆行	kantyoo=no	wagadomo=ba	mitotta	tyuute
A < P	鹿=が	お前ら=を	見てた	といって

¹ なお、これは格標示にとどまらず、ディレクト・インバースの交替(Givón 1994)など、より広い現象に通じるメカニズムである。デフォルト予測に対する警告のシグナルが他動詞文における格標示になるか、動詞側のマーキングで生じるか、というのは別の問題であり、別種の類型化につなげていくことができるであろう。

問題点：話者3の体系の解釈

どの話者についても、「ハダカ標示のみ許容」という文法性判断がないことがわかった。絶対的有生性ベースの対格交替を持つと解釈した話者3について、この点は問題となる。

相対的有生性ベースの対格交替は A と P の相互識別のために有形対格が使われるシステムである。よって、P が無生であれ有生であれ、相互識別に役立つ限り有形標示されるし、仮に必要なないところに標示されたとしても、過剰標示（無駄）であって文法性（違反）の問題ではない。このことから、相対的有生性ベースの対格交替では、「ハダカ標示のみ許容」という文法性判断は生じないと予想される。話者1, 2の体系はこの予想どおりである。

一方、絶対的有生性ベースの対格交替は、ハダカ標示は無生 P を積極的に標示し、文法性判断に直結するものであるから、無生ならばハダカ標示のみ、という場合がありうる（cf. 東北方言の対格交替）。尾前方言の話者3の体系は、無生 P に対して有形標示を許容するので、絶対的有生性ではなく相対的有生性ベースの対格交替に合致したふるまいをする。

話者3の体系が相対的有生性ベースの対格交替を部分的に有している直接的な証拠もある。以下のようない無生物主語他動詞文（等位）に関して、すべての話者において有形標示が義務的との内省を得た。

(7) teppuu=no tama=ga tubasaki=oba/*∅ utiniita.
鉄砲=の 弾=が つばさき=ACC 撃ちぬいた

これは等位関係なので、相対的有生性の観点からは有形標示が義務的になることが説明可能であるが、絶対的有生性の観点からは説明不可能である（無生 P にはハダカ標示を許容すると予想されるため）。一方、話者3が純粋に相対的有生性ベースの対格交替を有しているともいえないのは表1から明らかである。このように、話者3の対格交替は、絶対的 vs. 相対的有生性のいずれとも決めがたい状況である。

3 言語研究における位置づけ

Differential Object Marking

本発表で扱った対格交替は、一般言語学的には Differential Object Marking (DOM) としてとらえることができる。DOM は、形式面をベースに定義すれば、一部の目的語だけが有標標示され、ほかは無標形になる現象である (Aissen 2003 ほか多数)。DOM には大きく2種類あり、① P に通常期待されるデフォルトの特性（無生物・不定・不特定）から逸脱する場合に有標標示が生じる DOM と、② A と P のデフォルトの組み合わせ（本発表でいう順行）から逸脱する場合に有標標示が生じる DOM の2つがあるが (Malchukov 2008)、DOM の研究史は①にばかり注目しているようである。東北方言の対格交替は①の DOM として位置付けることができそうである。尾前方言の話者1, 2の体系は②の DOM として位置づけられるのではないかと考えられ、DOM の研究に新たな視点を持ち込むことが期待される。なお、竹内・松丸(2015)は宮城県登米方言に②の DOM が存在する可能性を示唆しており、尾前方言とともに日本語方言の中で注目される。

尾前方言の相対的有生性ベース対格交替は、相対的有生性に敏感であるという点以外にも、これまで DOM で典型と考えられてきたことと大きく違う点がある。尾前方言には有形の主格(ga/no)が存在し、出現する主語がハダカで生じることがめったにない。よって、A が主格標示されることによって結果的に P も同定できる仕組みが整っているかにみえる。相対的有生性ベースの DOM は、相互識別に特化したシステムなので、A を積極的に同定できる仕組みがない言語においてこそ、その効力が発揮されるはずである。この問題について、発表者は、尾前方言に有形主語標示があったとしても、それは A と P の相互識別になかなか役立たないようになっているのではないかと考えている。尾前方言の自然談話データやその他の自由発話データをみると、一番頻度の高い他動詞文は[A]PV ([A]は発話されない A)である²。つまり、実際の談話では A の格標示によって相互識別を行うことはできないことが多い。よって、より安定して出現する P に対する標示によって相互識別を行うのは合理的である。

4. その他

調査にあたって

翻訳型だと、標準語の構造的影響が常に気になる。しかし、例えば絵を見せて自由に描写するような非翻訳型だと、コントロールが効かなくなって他動詞文という構文そのものをとれない可能性がある。最近、その折衷案として、絵をみせて「誰が何しているところ？」と聞く elicitation も使い始めているが、有効性は不明。こういう方法論の議論は「理論の人たち」とやってみたい。この方法は、①他動詞文フレームを使ってくれる可能性が高い、②特定の項焦点になりにくい、など、経験上のメリットはある。なお、自然談話は、大まかな仮説を立てる上で必要不可欠であるが、厳密な検証にはなかなか向いていないことを実感している。否定証拠にアクセスできず、演繹的予測のチェックができないからである。

調査票の提案

国立国語研究所発行の『方言文法全国地図』(GAJ)の 6 番「酒を飲む」と 7 番「俺を連れていってくれ」のペアは全国諸方言の有生性ベースの対格交替を知るうえで重要な資料であり、その地図情報はとても役に立つ。しかし、本発表の結果をもとにすると、以下のように改善すべき点もあるだろう。

表 5. GAJ と有生性

GAJ の例文番号	P 項の絶対的有生性	A/P 項の相対的有生性
6 番：(あの人は毎晩) 酒を飲む	無生物	順行
7 番：俺を連れて行ってくれ	人間 (代名詞)	逆行

²風間(2015)は標準語口語の会話テキストの分析で、主語なし文 ([S/A]) が 6 割を占めることを指摘している。発表者が調査をする琉球伊良部島方言でも同様に、談話データにおいては他動詞文で[A]PV が最も高頻度である。よって、この傾向は日琉語族の方言一般の特徴だと考えてよいだろう。

(8) GAJ の 6 vs. 7 番の対比の問題点

- (a) 相対的有生性か絶対的有生性のいずれが有効なファクターなのか分からない。
- (b) 有生性の問題なのか名詞句の形態統語的特徴（代名詞 vs. 語彙名詞）なのか分からない。
- (c) 格標示以外のファクターを誘発している可能性。7 番は命令文なので、「俺_連れて行ってくれ」という風に、1 人称代名詞をハダカ標示しても、これが目的語であることは明確。よって、6 番・7 番ともに無助詞だったとしても、DOM が一切ないことの証明にはならない。むしろ、経済性の原則に忠実な相対的有生性ベースの DOM が存在しているかもしれない。

よって、今後、全国の諸方言の DOM の地理的分布をみる際は、表 2 のような例文セット（変数が同じなら、名詞や動詞は違ってよい）も使うべきであろう。以下に、簡単に事例を報告する。

北琉球語奄美諸方言は有形対格 ba とハダカ標示の交替がみられる。GAJ でこの地域は 6 番がハダカ、7 番が有形(ba)の区域にあたる。Niinaga (2014)によれば、P が代名詞・呼称人間名詞（親族名称など）の場合は有形対格が義務的、それ以外は随意的であるという。つまり、東北方言と同様、絶対的有生性の観点で説明を試みている。そこで、本発表者が作成した例文セット（表 2 とは動詞や名詞が異なるが、変数は同一）を使って新永氏が調査した結果、P の有生性では説明できない現象が報告されている（新永悠人, p.c.）。例えば、順行の場合は、P が人間でも動物でもハダカ標示が可能であるのに対し、等位・逆行の場合は原則、有形標示のみになる。ただし、動詞で「追いかける」を使用したため、人間名詞の等位「友達が泥棒を追いかけた」は例外的にハダカ標示になっている。これは「追いかける」という動詞の意味から、「泥棒が P」という予測を生み、ハダカ標示を許容しているとみることでもある。つまり、この例は相対的有生性が等位関係だとしても、デフォルト予測が効く点で、順行関係のように考えることができそうである。よって、泥棒を主語に置くと有形 P となることが予測され、一方で（デフォルト予測を排除できる）表 2 の「見る」を使えば、いずれの場合でも有形 P となることが予測される。これらの追加調査はまだ行っていない。別の機会に報告したい。

参考文献 Aissen, Judith (2003) Differential object marking: iconicity vs. economy. *Natural Language and Linguistic Theory* 21: 435-83/Givón, Talmy (1994) *Voice and inversion*. John Benjamins/日高水穂(2005)「方言における文法化」『日本語の研究』1(3): 77-92/Malchukov, Andrej L (2008) Animacy and asymmetries in differential case marking. *Lingua* 118: 203-221/風間伸次郎(2015)「日本語（話しことば）は従属部標示型の言語なのか?」『国立国語研究所論集』9: 51-80/木部暢子(2015)「対格助詞ゼロの地域差」第 101 回日本方言研究会予稿集/松田謙次郎(2000)「東京方言格助詞「を」の使用に関わる言語的諸要因の数量的検証」『国語学』51 (1)/Næss, Åshild (2007) *Prototypical Transitivity*. Amsterdam: John Benjamins/ Niinaga, Yuto (2014) A grammar of Yuwan, a Northern Ryukyuan language. PhD dissertation, University of Tokyo/佐々木冠(1998)「水海道方言の対格－有生対格と無生対格の統語論－」『日本語科学』4: 99-121/下地理則・小川晋史・平塚雄亮・新永悠人・坂井美日編(2016)「中間報告書－宮崎県椎葉村尾前方言の文法概説と簡易語彙集」国立国語研究所/竹内史郎・松丸真大(2015)「本州方言における他動詞文の主語と目的語を区別するストラテジー」NINJAL「格・アスペクト・ボイス」共同研究会資料。